

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 2 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520376

研究課題名(和文) 18世紀フランスにおいてリベルタン文学と版画が果たした役割についての研究

研究課題名(英文) Studies in the Libertine Literature and (Erotica) Illustrations of Eighteen-Century France

研究代表者

関谷 一彦 (SEKITANI, Kazuhiko)

関西学院大学・法学部・教授

研究者番号：40288999

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：リベルタン文学の重要な作品であるサドの『閨房哲学』を翻訳し、人文書院から出版した。拙訳では、フランス国立図書館所蔵の初版本Enfer 535・536を底本とし、プレイヤッド版などを参照しながら、必要と思われる箇所に注を付けた。また、「訳者解説」で本研究の目的であるリベルタン文学とは何か、リベルタン文学の典型である本書はどのような思想やリベルタン文学の影響を受けているのか、またその後どのような影響を与えたのかを明らかにした。

2015年2月26～28日にジュネーブ大学で開催された国際学会「サドの言語」に招待され、この翻訳をもとに『閨房哲学』の翻訳の難しさ、サドの作品の文学的意義について発表した。

研究成果の概要(英文)：I published a Japanese translation of La Philosophie dans le boudoir, French author Marquis de Sade's best known work. I translated the original text of the first edition owned by National Library of France (Bibliothèque nationale de France /BnF), referred to the Pléiade edition, and wrote an extended comment on important parts. In the translator's commentary, I gave a detailed account of the libertine literature and focused on the interaction between the literature and 18th century thought.

I was invited to the international conference, "Sade's Language," held in Geneva University, from 26 to 28 February 2015. In the conference, I did a presentation about the difficulty of translating La Philosophie dans le boudoir, and the importance of Sade's literature.

研究分野：仏文学

キーワード：仏文学 リベルタン文学 リベルタン版画 18世紀 サド 閨房哲学

1. 研究開始当初の背景

18世紀フランス文学研究の中で、これまでリベルタン文学はあまり注目されてこなかった。その理由は、猥褻な箇所を含むために、これまでは研究に値しないものと見なされてきたからである。しかしフランスではプレイヤッド版の *Romanciers libertins du XVIIIe siècle* (『18世紀のリベルタン小説家』、第1巻2000年、第2巻2005年) が出版され、Jean Marie Goulemot や Patrick Wald Lasowski らの研究によってようやく学問対象として認知されつつある。一方、日本でも事情は同じで、リベルタン小説はあまり紹介されてこず、サドの作品を澁澤龍彦が精力的に紹介したが、紹介の仕方が非合法的な作品に偏っていたために全体像を歪める結果になっている。歴史学研究では、ロバート・ダーントンはリベルタン文学がフランス革命前にはベストセラーの一つであったことを明らかにし、フランス革命を準備した一つの要素であると指摘している (Robert Darnton, *The Literary Underground of the Old Regime*, Harvard University Press, 1982)。しかしながら、具体的にどのように読まれ、受容され、意識変革を促し、社会に浸透していったのかは明らかになっていない。リベルタン文学についての文学研究からのアプローチは非常に遅れており、日本ではリベルタン文学の紹介すらほとんどなされていないのが現状である。先行するフランスでの研究成果を踏まえて、リベルタン文学を紹介するとともに、リベルタン文学が革命前のフランス社会に果たした役割についての研究は文学という個別研究の枠組みを超えて、思想、歴史、社会に関わる重要な問題であると考えられる。

また、リベルタン小説にはさまざまな版画が挿入されていることが多いが、こうした版画研究はほとんど手つかずの学問領域であり、フランス18世紀のリベルタン版画

を紹介、分析することも重要な研究である。その理由は、版画は文字の読めないものまでも観賞者として引きつける力を持ち、意識変革に果たした役割は重要であると考えられるからだ。さらに、フランス18世紀の版画を、江戸時代の日本の版画と比較研究をすることで、日本とフランスの版画の比較研究も目指している。より広い射程として、版画を通しての比較研究から、日本とフランスの文化比較の可能性も内在していると考えている。

2. 研究の目的

猥褻であるという理由で研究対象から排除されてきたリベルタン文学やリベルタン版画が18世紀フランス社会で具体的にどのように読まれ、受容され、意識変革を促し、社会に浸透していったのかは明確になっていない。しかしながらダーントンの研究によって、リベルタン文学が18世紀のベストセラーの一つであったことが明らかになり、フランス革命前の混沌とした状況を生み出すことに貢献したことが指摘されている。これまであまり注目をされてこなかったリベルタン文学を紹介し、18世紀フランス社会で果たした役割を本研究で明らかにするのが目的である。

3. 研究の方法

上記の研究目的を達成するために以下のような方法で研究を行なった。

1) リベルタン文学とは何かを考えるために、リベルタンという語の変遷およびリベルタン文学の歴史について検討した。このような検討から、「リベルタン」の語源であるローマ時代の「解放奴隷の子」から、16世紀には、宗教から逸脱した者、つまり自由思想家を蔑視する意味で用いられるようになり、17世紀に入ると、思弁よりも実践を重んじるエピキュリアン(快樂主義者)

に向けてリベルタンが用いられ、非宗教的な意味から放蕩へと意味を変えていくことがわかった。また、リベルタン文学の歴史は、ルネッサンスのピエトロ・アレティーノの『淫らなるソネット集』や『ラジオナメンティ』に遡り、17世紀では、『娘たちの学校』に継承され、18世紀には『カルトゥジオ会修道院の門番の物語』や『女哲学者テレーズ』などへと続いていく。18世紀になると暗示的に、あるいは直截に性を描く作品が増えていく。それがクレピヨンやサドのリベルタン文学と言われる作品であり、とりわけその典型であるサドの『閨房哲学』の翻訳に取り組んだ。

2) 「自由思想」と「放蕩」が描き込まれた『閨房哲学』はすでに翻訳に着手していたこともあり、本文の訳はそれほど時間がかからなかった。しかしながら、これまで詳細な注を付けた翻訳がなかったので、注を付けるために膨大な資料を読み込まなければならず、そのために時間をとられた。また、本訳書の「訳者解説」で、研究課題である「18世紀フランスにおいてリベルタン文学と版画が果たした役割について」、『閨房哲学』の分析を通して明らかにした。

3) リベルタン版画に関しては、『閨房哲学』の初版本の挿絵をはじめとして、多くの挿絵を収集し、分析を行った。その一端は「訳者解説」において、言及した。

4) 日本の春画についても収集した。また、2013年秋からロンドンの大英博物館で開催された春画展『春画 日本美術における性とたのしみ』を鑑賞した。どういうわけか日本では開催されない春画展であるが、165点という大規模な特別展で歌麿や北斎の代表的な春画が一挙に見ることができる画期的な展覧会であった。しかし、リベルタン版画と春画の比較研究はあまり進展していない。今後継続して研究していく予定である。

4. 研究成果

リベルタン文学のなかでもっとも重要な作品の一つであるマルキ・ド・サドの『閨房哲学』を翻訳し、人文書院から出版した。『閨房哲学』はすでに訳は存在するが、多くが抄訳であり、全訳されているものも注は一切なく、サドの思想系譜や他のリベルタン文学との関連には何ら触れられていない。また、既訳では多くがボヴェール版を底本としている。そこで拙訳では、フランス国立図書館所蔵の初版本 Enfer 535 および 536 を底本とし、もっとも精緻な注が付されているプレイヤッド版を参照するとともに、フランスで出版されている *La Philosophie dans le boudoir* のさまざまな校訂版を比較し、注を参照しながら必要と思われる箇所に注を付けた。また、「訳者解説」でリベルタン文学とは何か、リベルタン文学の典型である『閨房哲学』はどのような思想やリベルタン文学の影響を受けているのか、またその後どのような影響を与えたのかを明らかにした。

2015年2月26日 28日にジュネーヴ大学で開催された国際学会「サドの言語」に招待され、この翻訳をもとに『閨房哲学』の翻訳の難しさ、サドの作品の文学的意義について発表した。Philippe Roger と Martin Rueff が中心となって開催されたこの学会の成果はまもなく一冊の本となって出版される予定である。また、ジュネーヴの後リヨンに立ち寄り、リヨン第二大学の Denis Reynaud、Michael O'Dea、リヨン IUFM の Anne-Marie Mercier、グルノーブル第三大学の Christophe Cave とリベルタン文学が当時の18世紀社会のなかで果たした役割について意見交換し、今後の研究についても協力を依頼した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

1) 関谷一彦、«Comment a-t-on pensé l'onanisme au XVIIIe siècle en France (en particulier contre Tissot) et au Japon ?» 『言語と文化』、16号、査読無、関西学院大学言語教育研究センター、91-99、2013.

2) 関谷一彦、「サドの『閨房哲学』の思想系譜とリベルタン文学としての位置」、『外国語外国文化研究』、16号、査読無、関西学院大学法学部、27-62、2013.

[学会発表](計1件)

1) 関谷一彦、«Traduire *La Philosophie dans le boudoir* en japonais : de quelques difficultés rencontrées»、国際学会『サドの言語』(招待講演)、ジュネーヴ大学(スイス)、2015年2月28日.

[図書](計1件)

1) 関谷一彦、『閨房哲学』、人文書院、345頁、2014.

6. 研究組織

(1)研究代表者

関谷 一彦 (SEKITANI, Kazuhiko)

関西学院大学・法学部・教授

研究者番号：40288999

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：